

アジアサッカー育成年代選手の競技力に関する研究 ーブータン王国U-13代表選手の競技力と日本の同年代選手との比較からー

松山	博明	中村	泰介
二宮	博	武藤	克宏

論文

アジアサッカー育成年代選手の競技力に関する研究
－ブータン王国 U-13 代表選手の競技力と日本の同年代選手との比較から－

松 山 博 明 中 村 泰 介
追手門学院大学 園田女子大学短期大学部
二 宮 博 武 藤 克 宏
ガンバ大阪 ギラヴァンツ北九州

Performance of young Asian soccer players
-Comparison between Bhutanese and Japanese U-13 national soccer team players-

Hiroaki MATSUYAMA Taisuke NAKAMURA
Otemon Gakuin University Sonoda Women's University
Hiroshi NINOMIYA Katsuhiro MUTO
Gamba Osaka Football Club Giravanz Kitakyushu Football Club

Abstract

Performance levels of U-13 Bhutanese national soccer team players coached by Japanese coaches dispatched overseas under the JFA Asia Project were assessed using JFA physical measurements as well as DIPCA.3 and analyzed by comparing with Japanese national soccer team players of the same age group. The results indicated that scores of Bhutanese players for all 12 items were lower than Japanese players. The comparisons using JFA physical measurements indicated that the score for the “long kick using the left or right foot by taking one-step” and the “long free-kick using the left or right foot,” of Bhutanese players were approximately half that of Japanese players, the difference between the two teams in the Step 50 test of agility was 3.60 seconds, in the throwing test it was 3.80m, whereas, in the bounding test, it was 1.82m. The comparisons using DIPCA.3 indicated a significant difference in the “fighting spirit” in the competitive motivation of 6.26 points on average. On the other hand, the difference was smaller for “confidence” (0.76 on average) compared to the other items, which might be a temporary phenomenon. These results suggest the need for Japanese soccer coaches to understand the performance levels and conditions of players in each category and the need to continuously develop their physical and mental aspects from a long-term perspective in the process of supporting Bhutanese soccer players.

キーワード：海外派遣サッカー指導者，ブータン，サッカー，U-13

Keywords：Expatriate soccer coach, Bhutan, Soccer, U-13

※松山博明（追手門学院大学）
二宮 博（ガンバ大阪）
中村泰介（園田女子大学短期大学部）
武藤克宏（ギラヴァンツ北九州）

1. はじめに

ブータン王国（以下：ブータンとする）では、サッカーが国民的なスポーツとして楽しまれている、と聞くと、意外に思われるかもしれない。もちろん、古くからサッカーが国民の娯楽だったわけではなく、その歴史は、せいぜいこの30年ほどであると考えられる。ブータンにおける伝統的な国技と呼ぶべきものは、弓技、すなわちアーチェリーである。これは国のほぼ全土で親しまれており、毎週末には、広場でアーチェリーを楽しむ姿をよく見かける。

ブータンにおいて、サッカーが、いつから、そしてなぜ人気スポーツになったのか、その時期と原因は残念ながら定かではない。テレビの導入による影響ではないかと推察されたが、どうやらそれ以前から人気があったと推測される。1990年代には、衛星放送を通じてサッカー中継を楽しむ姿も見られたという（平山, 2005）。加えて、ブータンの高僧ケンツェ・ノルブ〔Khyentse Norbu〕が監督を務めた、『ザ・カップ〔The Cup〕』〔1999〕というフィクション映画（ブータン・オーストラリアの共同制作）がある。この映画は、1998年に開かれた国際サッカー連盟（Fédération Internationale de Football Association：以下 FIFA とする）ワールドカップ・フランス大会がモチーフとして描かれる。フィクションとはいえ、このような映画が公開されている時点で、当時のブータンにおけるサッカー熱がありありと伝わってくる。続く2002年のワールドカップ・日韓大会時においては、ちょうど、横浜で決勝戦が行われていた、そのときに、ブータンの首都ティンブーにおいて、当時の世界ランキング最下位のモントセラトと、その一つ上のブータンの間で、最下位決定戦が開かれることになった。しかも、このときの様子は、オランダ・日本共同制作による映画、『アザー・ファイナル〔The Other Final〕』〔2003〕（ヨハン・クレイマー〔Johan Kramer〕監督作品）としてドキュメンタリー映像化され、世界的にも話題を集めた。この試合に出場していた、元ブータン代表のウゲン・ドルジ〔Ugyen Dorji〕は、ドイツメディア Deutsche Welle のインタビューに対して、当時の様子を、「ティンブー中がこの試合に注目していた」と語り、「多くの人が、より一層サッカーに興味を抱ききっかけになった」と述懐している（Deutsche Welle, online）。その当時、最下位決定戦を行っていたブータンサッカーであったが、多くの人が、より一層サッカーに興味を抱き、サッカーの本格的な強化を行うために、以前から交流していた公益財団法人日

本サッカー協会（Japan Football Association：以下 JFA とする）との間で2008年から JFA アジア貢献事業の派遣を行うことになった。JFA アジア貢献事業は、アジア近隣諸国や地域との交流を目的に、アジアサッカー発展のために人材の活発な交流を行っている（JFA, 2013）。ブータンに関しても、これまで JFA アジア貢献事業の一環で、ブータン代表チーム監督兼アカデミーヘッドコーチとして、代表チームと育成強化のために2008年4月から行徳浩二氏が赴任した後、2019年まで7名の指導者が派遣されている（JFA, online）。2016年から2年間赴任した U-14・U-17 ブータン代表監督である李成俊氏によるとブータンには歴代の日本人指導者達による功績が多くある。その一つは、サッカーにおける規律と取り組む姿勢、そして、技術・戦術はもちろん、サッカーの持つ可能性を大いに広げ、ブータンサッカーに良い刺激を与えたことであると述べている（JFA, online）。

しかし、2012年から2年間赴任したラオス人民民主共和国（以下ラオスとする）代表監督であった木村浩吉氏によると育成年代のクラブづくりとそれに伴う指導者養成と育成年代のゲーム環境を構築することが急務であると述べている（JFA, 2014）。また、西（2008）は代表の強化は短期の強化のみでなく、日々の所属チームでのトレーニングによりなされているとしている。つまり、その国の競技力向上を行うためには、長期的な視野に立って、普及・育成年代から日々の地道な努力が必要であると考えられる。

これまでブータン育成年代選手の競技力の実態調査を行った先行研究では、松山ら（2015）のブータン王国サッカー U-19 アジア選手権の実践活動を中心に行った研究がある。この研究によって、強化育成環境の整備と選手の発掘育成システムを構築することや各地域でのサッカーの普及活動と試合環境の改善をすることが施策として挙げられた。また、松山ら（2018）のブータン地域のサッカー選手の育成レベルなどのコーチング環境の実態調査を行なった。その結果、ブータンサッカー協会（Bhutan Football Federation：以下 BFF とする）は、各地域でのサッカーの普及活動と試合環境の改善を行っていく必要があると報告されている。松山ら（2019）の JFA アジア貢献事業の海外派遣サッカー指導者が指導する競技力に関する JFA フィジカル測定や DIPCA.3 の実態を明らかにして、ブータンと北マリアナ諸島自治連邦区（以下：北マリアナ諸島とする）の2か国による U-17 代表選手の競技力の実態調査を行った。その結果、ブータンと北マ

リアナ諸島は、他国と比較してフィジカルの要素や心理的要素が備わっていないことが明らかになった。しかしながら、これまでの研究だけではブータン代表チームは、各カテゴリー選手の十分な情報が報告されていない。また、サッカー先進国である日本の同年代選手との差がどの程度であるのかも明らかにされていない。こうした十分な競技力に関する報告がなされていない国のサッカーレベルや新たに派遣された指導者が選手やチームの実態を把握して支援活動を行うためには、競技力に関する実態が必要不可欠である。そこで、本研究ではJFA アジア貢献事業の海外派遣サッカー指導者が指導するブータン U-13 代表チームの競技力に関する JFA フィジカル測定や DIPCA.3 の実態を明らかにして、日本の同年代選手との比較などを通して分析を試みることを目的とした。

2. 方 法

2.1. 調査対象

JFA アジア貢献事業が指導している 13 歳以下の代表チーム選手のブータン選手 (n=21)、22 名中 21 名 (有効回答率 95.4%)、平均年齢 12.62 歳 (10 歳 ± 13 歳) を調査対象に JFA フィジカル測定と DIPCA.3 を実施した。JFA フィジカル測定と DIPCA.3 の調査は、得られた回答のうち、すべての測定が不可能であった選手を除いた。

調査は、研究者本人がブータンに赴任している海外派遣サッカー指導者に出向き、BFF に調査の承諾を得たうえで、調査の目的などを赴任している指導者が現地スタッフと選手に説明し、測定と検査結果を現地で回収した。

2.2. 調査内容

JFA フィジカル測定は、世界が使用している基準を調査、検討し、さらに国内外でも活用できるように作成されている。JFA フィジカル測定ガイドライン (JFA, 2006) に従って、ブータンで測定可能な 12 種目 (20m 走, 50m 走, アジリティステップ 50, アジリティフォワードラン, ロングキック右足 1 ステップ, ロングキック右足フリー, ロングキック左足 1 ステップ, ロングキック左足フリー, スローイン, バウンディング, ホッピング右片足, ホッピング左片足) から調査を実施した。

DIPCA.3 は、スポーツ選手に必要な試合場面での一般的特性としての心理的競技能力を診断するための心理検査である。スポーツ選手の心理的「特性」としての心理的競技能力を診断する心理検査は、52 の質問項目から構成されている。また、競技意欲 (忍耐力, 闘争心, 自己実現意欲, 勝利意欲), 精神の安定・集中 (自己コントロール能力, リラックス能力, 集中力), 自信 (自信, 決断力), 作戦能力 (予測力, 判断力) 及び協調性の 5 因子及び 12 下位尺度に分類される調査法である (徳永ら, 1991)。したがって、合計 12 下位尺度から調査を実施した。

2.3. 調査期間

2014 年 4 月 27 日に合計 1 日間実施した。

3. 結 果

3.1. JFA フィジカル測定結果

日本の 2004 年度フィジカルデータ測定報告 (JFA, 2004) とブータン U-13 代表チームとの平均値で比較した。その結果、ブータンは日本の同年代の代表チームと比較した場合、12 種目中全てにおいて、低い数値であった (表 1)。

表 1 フィジカルデータ計測値 (平均) 分析結果

項 目	単位	日本	ブータン
20m	sec.	3.50	3.60
50m	sec.	7.20	8.40
シャトルラン	sec.	12.00	13.00
アジリティStep50	sec.	15.80	18.20
ロングキック右 1 ステップ	m.	31.60	17.00
ロングキック右フリー	m.	40.10	23.00
ロングキック左 1 ステップ	m.	27.60	12.20
ロングキック左フリー	m.	30.70	14.00
スローイング	m.	14.00	10.20
バウンディング	m.	6.32	4.50
ホッピング (右)	m.	5.86	4.50
ホッピング (左)	m.	6.02	5.00

【計測日】日本代表「U 13/U 14」: 2004 年 7 月 20 日

3.2. DIPCA.3 測定結果

大嶽ら（2003）による DIPCA.3 の研究結果とブータンの平均値で比較した。その結果、ブータンは 12 尺度中全

てで低い数値であった（図 1）。

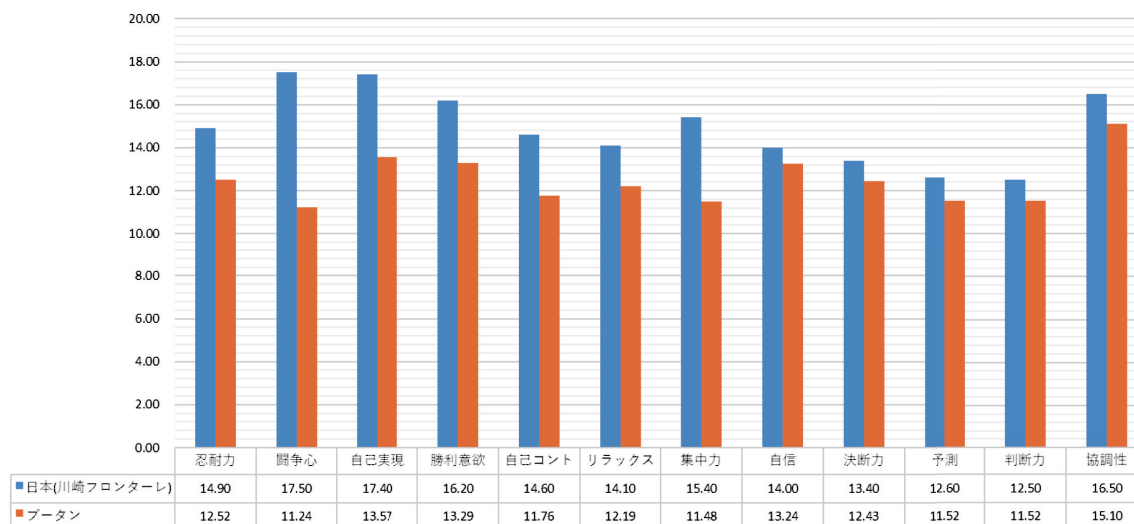


図 1 DIPCA.3 分析（平均）結果

4. 考 察

4.1. JFA フィジカル

JFA フィジカル測定の結果、ブータンは日本の同年代の代表チームと比較した場合、12 種目中全てにおいて、低い数値であった。その中でも、特にロングキック右足 1 ステップ（日本：31.60 m / ブータン：17.00 m）、ロングキック右足フリー（日本：40.10 m / ブータン：23.00 m）、ロングキック左足 1 ステップ（日本：27.60 m / ブータン：12.20 m）、ロングキック左足フリー（日本：30.70 m / ブータン：14.00 m）に関して、ブータンは日本の能力の 2 分の 1 程度に留まり、大きな能力の差があった。ブータン代表チームでは、基礎的な技術レベルが低い「止めて蹴る」などのトレーニングをほとんど毎日のようにメニューを導入した。また、技術面のトレーニングでは、選手の興味や集中力を持続させるために、メニューを少しずつ変化させ工夫したと報告されている（松山，2014）。ブータン U-19 代表年代においても、育成年代ですでに習得しておかなくてはならない技術が低かったため、トレーニング全体の 14.0% を行ったと述べている（松山，2013）。このことから、ブータンサッカー全体の技術面が低いと考えられる。しかし、同じ JFA アジア貢献事業の海外派遣サッカー指導者が指導しているカンボジ

アにおいては、アカデミー選手のトレーニングで全体の 22.7% を技術トレーニングに費やした結果、ロングキック左足 1 ステップに関しては、JFA フィジカル測定の 1 回目から 3 回目のすべてにおいて、有意に向上がみられた。また、ロングキック右足 1 ステップ、ロングキック右足フリー、ロングキック、ロングキック左足フリーでは 3 回目において 1 回目よりも有意な向上がみられたの報告されている（松山ら，2016a）。小野（2010）は、ボールコントロール、パスやシュートなどの基本技術がないと世界では通用せず、育成年代からの積み重ねが不可欠であると述べている。このことから、ブータンにおいても、育成年代から技術トレーニングを徹底させることによって競技力向上につながっていくと考えられる。

また、20 m（日本：3.50sec. / ブータン：3.60sec.）、50 m（日本：7.20sec. / ブータン：8.40sec.）、シャトルラン（日本：12.00sec. / ブータン：13.00sec.）、アジリティ Step50（日本：15.80sec. / ブータン：18.20sec.）に関して、ブータンは日本の能力の 1.00sec. 以上の差があった。特にアジリティ Step50 に関しては、3.60sec. の差があった。松山ら（2016b）の 3 か国による U-14 代表選手の競技力の実態調査から、カンボジアなどの FIFA ランキング中位国は、北マリアナ諸島やラオスの FIFA ランキング下位国

よりシャトルランやアジリティ Step 50 などのアジリティの能力が高かったと報告されている。FIFA ランキング下位国は、アジリティの能力を中心としたトレーニングが乏しいと言わざるを得ない。しかしながら、松山ら(2016a)のカンボジアフットボールアカデミー選手の実態調査によると、アジリティ Step 50 は、1 回目より 2 回目、1 回目より 3 回目において、有意に高値を示したと報告されている。カンボジアフットボールアカデミー選手のアジリティトレーニングは、全体の 2.9% を占めており、トレーニング前に導入したラダーによるアジリティを取り入れていた効果だと報告されている。このことから、ブータンに関しても、速筋繊維の発達が促進されるトレーニングを、より多く実施することによって、細かいステップや反転や反応の速さなどといった神経系の発達を促し、向上することが出来ると考えられる。

次にスローイング（日本：14.00 m / ブータン：10.20 m）、バウンディング（日本：6.32 m / ブータン：4.50 m）、ホッピング（右）（日本：5.86 m / ブータン：4.50 m）、ホッピング（左）（日本：6.02 m / ブータン：5.00 m）に関して、ブータンは日本の能力の 1.02 m 以上の差があった。特にスローインでは、3.80 m の差、バウンディング 1.82 m の差があった。こうした下半身や上半身などの身体能力に関して、平山（2005）によると一般的にブータン人の基本的な身体能力は高い。しかし、スポーツに慣れ親しんでいなく、その身体能力の使い方を知らないのである。しかも、体力はあるのだが、基礎的な筋力のない人が多いと述べている。これは、これまで海外派遣サッカー指導者や体育教育がなかったことで、本来持っている能力が十分発揮できていなかったと考えられる。また、同じ FIFA ランキング下位国の北マリアナ諸島においても、身体能力が高い選手が多いものの、サッカー経験者が少ないため、サッカーに即したフィジカル的要素が備わっていないと報告されている（松山ら、2016b）。2015 年から 2 年間赴任したカンボジアフットボールアカデミー・U-15 カンボジア代表監督であった壺岐友輔氏は、カンボジアにおいても基礎運動能力が非常に低い子どもたちが多いのが現状である。しかし、やればやるほど上達し、できないことを丹念にやって短所を克服することが大事だという意識もだんだんと芽生えてきた手応えがあると述べている（サカイ、online）。このことから、ブータンにおいても、身体能力を向上させるためのトレーニングを継続的にして地道に取り組むことによって、競技力向

上に繋がっていくと考えられる。

4.2. DIPCA.3

DIPCA.3 の結果、ブータンは、日本の J リーグ育成チームと平均値で比較した場合、ブータンは 12 尺度中全てで低い数値であった。その中でも、特に、競技意欲の闘争心（日本：17.50 / ブータン：11.24）に他の値と比較して平均値 6.26 の大きな能力の差があった。ブータンの選手の傾向として、試合中において選手の冷静さを欠く判断ミスによる退場、試合開始後 15 分間の失点、失点後の連続失点する場面が他国と比較して非常に多かったと報告されている（松山、2014：2015）。このことから、ブータンの選手が試合前からポジティブな考えの思考や行動をとる、自分の感情をコントロールする、ゆっくりと集中の範囲を狭め、集中力を高めていくなどして闘争心を徐々に高めていく必要があると考えられる（ビル・ベスウィック、2006）。しかも、ここ数年間、ブータン代表チームが国際大会を臨むにあたって、1 勝も挙げていない状況である（松山、2014：2015）。こうした国際大会などの大きな大会で数多くの入賞経験を踏んでいないと競技意欲である闘争心は高くない（徳永、1991）。2018 年から 1 年間赴任したブータンアカデミー U-16・U-19 代表監督であった中村敦氏によると、ブータンサッカーに心理的な意識改革を起こすために海外に出て強い相手と試合をする事はチーム強化の必須条件と考え、JFA の協力の元、2018 年にブータン U-18 代表が福島県と神奈川県内でトレーニングキャンプを実現させることが出来たと報告されている（JFA 社会貢献活動、online）。また、乾（1996）は、1995 年ユニバーシアード国際大会で日本代表チームが優勝した勝因の一つとして、海外強化遠征による豊富な国際経験を挙げている。このことから、闘争心を駆り立てられるような環境化でトレーニングできる環境が必要とされる。

また、現在ブータン国内において、U-18 世代では BFF アカデミーの他にクラブは存在しない。U-15 は BFF アカデミー以外にもチームはあるが、同年代の他チームとは力の差があり過ぎるため試合相手に困っている。つまり、育成年代において継続的に活動しているのは実質我らのアカデミーチームのみというのが現状であると述べている（JFA 社会貢献活動、online）。ブータンは、国内においても、対戦する相手チームのレベルなどによっても、競技意欲である闘争心や勝利意欲、自己実現意欲は低く

なってしまうと考えられる。このことから、ブータンにおいても試合環境の改善として国内大会のリーグ戦を積極的に導入することであると考えられる。

自信（日本：14.00/ブータン：13.24）に関しては、他の値と比較して平均値 0.76 の僅かな能力差であった。カンボジアのアカデミー選手によると 1 回目の DIPCA.3 では、地域で選抜されてアカデミーの組織に入ったという「選ばれしもの」の自信と自負、日本の指導者からの指導を受けていることなどから、より高い得点を示したと報告されている（松山ら、2016a）。同様に、大嶽ら（2003）による DIPCA.3 の研究結果と 3 か国の同年代の平均値と比較した結果、ラオスは、忍耐力、闘争心、自信、決断力、予測力、判断力、協調性の 12 尺度中 7 尺度で高い数値であった。北マリアナ諸島も、自信、決断力、予測力、判断力の 12 尺度中 4 尺度で高い数値であったと報告されている（松山ら、2016b）。しかしながら松山（2015）の育成年代選手の競技力に関する実態調査の結果では、心理的観点での「いつでも、自信をもってプレーする」の得点は、日本や韓国などの FIFA ランキング上位国は、ブータンや北マリアナ諸島、ラオスなどの下位国より有意に高値であった。このことから、ブータンが日本と比較して「自信」の値が高い結果になったのは、一過性のものだと考えられる。したがって、ブータンは、育成年代から継続的なトレーニングの実施や多くの国際大会の経験を積むなど、日ごろから心理面を強化していく必要があると考えられる。

以上のことから、JFA アジア貢献事業の一環で、日本サッカーが、ブータンの支援活動を行うためには、長期的視野に立ち、サッカーレベルや各カテゴリー選手の実態を把握し、フィジカル面やメンタル面を継続的に強化していく必要があると考えられる。

5. まとめ

JFA アジア貢献事業の海外派遣指導者が指導するブータン U-13 代表チームの競技力に関する JFA フィジカル測定や DIPCA.3 の実態を明らかにして、日本の同年代選手との比較などを通して分析を試みることを目的とした。その結果、ブータンは日本の同年代の代表チームと比較した場合、12 種目中全てにおいて、低い数値であった。

5.1. JFA フィジカル

JFA フィジカル測定の結果、特にロングキック左/右

1 ステップ、ロングキック左/右フリーに関して、ブータンは日本の能力の 2 分の 1 程度に留まり、大きな能力の差があった。ブータンにおいて、育成年代から技術トレーニングを徹底させることによって競技力向上につながっていくと考えられる。また、20 m、50 m、シャトルラン、アジリティ Step50 に関して、ブータンは日本の能力の 1.00sec. 以上の差があった。特にアジリティ Step50 に関しては、3.60sec. の差があった。ブータンにおいて、速筋繊維の発達が促進されるトレーニングを、より多く実施することによって、細かいステップや反転や反応の速さなどといった神経系の発達を促し、向上することが出来ると考えられる。次にスローイング、バウンディング、ホッピング（右）、ホッピング（左）に関して、ブータンは日本の能力の 1.02 m 以上の差があった。特にスローインでは、3.8 m の差、バウンディング 1.82 m の差があった。ブータンにおいても、身体能力を向上されるためのトレーニングを継続的に地道に取り組むことによって、競技力向上に繋がっていくと考えられる。

5.2. DIPCA.3

DIPCA.3 の結果、特に競技意欲の闘争心に他の値と比較して平均値 6.26 の大きな能力の差があった。このことから、ブータンにおいても闘争心を駆り立てられるような環境化でトレーニングできる環境が必要とされる。しかしながら、競技意欲の自信に関しては、他の値と比較して平均値 0.76 の僅かな能力差であった。ブータンが日本と比較して「自信」の値が高い結果になったのは、地域で選抜されてアカデミーの組織に入ったという「選ばれしもの」の自信と自負、日本の指導者からの指導を受けていることなどから、より高い得点を示した一過性のものだと考えられる。ブータンは、育成年代から継続的なトレーニングの実施や多くの国際大会の経験を積むなど、日ごろから心理面を強化していく必要があると考えられる。

以上のことから、JFA アジア貢献事業の一環で、日本サッカーが、ブータンの支援活動を行うためには、長期的視野に立ち、サッカーレベルや各カテゴリー選手の実態を把握し、フィジカル面やメンタル面を継続的に強化していく必要があると考えられる。

引用参考文献

- ビル・バスウィック:石井源信,加藤 久 訳 (2006) サッカーのメンタルトレーニング.大修館書店:東京, pp.82-132.
- Deutsche Welle.
<http://www.dw.com/en/soccer-minnow-bhutan-strives-for-greatness-on-the-pitch/a-17143385>. 2013 年 10 月 10 日掲載, (2015 年 3 月 5 日参照) .
- 平山修一 (2005) 現代ブータンを知るための 60 章. 明石書店:東京, pp.78-82.
- 乾真寛 (1996) 1995 ユニバーシアード福岡大会におけるサッカー代表チーム優勝の勝因に関する一考察, 日本体育学会, 47: 490.
- JFA (2004) 2004 年度フィジカルデータ測定報告. アサヒビジネス(株):東京, pp.26-27.
- JFA (2006) JFA フィジカルガイドライン. アサヒビジネス(株), pp.30-55.
- JFA (2013) JFA PLOFILE. JFA 機関紙, pp.1-26.
- JFA (2014) Technical news, Vol.60. サンメッセ:東京, pp.42-43.
- JFA (2017) JFA 強化指針 2017. アサヒビジネス(株), pp.4-7.
- JFA 社会貢献活動
https://www.jfa.jp/social_action_programme/news/00019047/ (2019 年 2 月 27 日参照)
- 松山博明 (2013) ブータン王国サッカーのコーチングに関する調査研究～U-19 代表チームにおける強化トレーニング内容の観点から～大阪体育学研究, 28.
- 松山博明, 土屋裕睦, 堀野博幸, 須田芳正 (2014) 海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題-JFA アジア貢献事業ブータン王国サッカーの実践活動を中心に-. 大阪体育学研究, Vol.52, 15-22.
- 松山博明, 土屋裕睦 (2015) 海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題-JFA アジア貢献事業ブータン王国サッカー U-19 アジア選手権の実践活動を中心に-. スポーツ産業学研究, Vol.25, No.1, 111-122.
- 松山博明, 松竹貴大, 土屋裕睦 (2016a) アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究-カンボジアフットボールアカデミー選手の実態調査から-. 大阪体育学研究, Vol.54, 3-13.
- 松山博明, 関口潔, 松竹貴大, 土屋裕睦 (2016b) アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究.- 3 か国による U-14 代表選手の競技力の実態調査から-. 大阪体育学研究, Vol.55, 51-59.
- 松山博明, 胡山喬, 林恒宏, 陳昱龍, 中村泰介 (2018) ブータン王国サッカーコーチング環境実態調査-ブータングラスルーツ活動 5 都市に着目して-. 大阪成蹊大学紀要, Vol.1, No.4, 193-201.
- 松山博明, 松竹貴大, 二宮博, 武藤克宏 (2019) アジアサッカー育成年代選手の競技力に関する研究-2 カ国による U-17 代表選手の競技力の実態調査から-. 追手門学院大学スポーツ研究センター紀要, Vol.4, 1-6.
- 西政治 (2008) 日本サッカーにおける育成期一貫指導の重要性と課題.- 世界に通用する選手育成-. 京都学園大学経営学部論集, Vol.18, No.1, 173-196.
- 大嶽真人, 須田芳正, 植田史生, 石手靖, 依田珠江, 古賀初, 田中博史 (2003) ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力について. 慶應義塾大学体育研究所紀要, Vol.42, No.1, 1-7.
- 小野 剛 (2010) サッカープレーヤーズレポート, カンゼン:東京, pp.226-230.
- サカイク.カンボジアにサッカーを!日本人コーチの挑戦.
http://www.sakaiku.jp/column/knowledge/2014/007511_2.html (2015 年 10 月 16 日参照)
- 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, 高柳茂美 (1991) スポーツ選手に対する心理的競技能力診断検査の開発. デサントスポーツ科学, Vol.12, 178 - 190.